

# ルール

〜依田家の晩餐〜

作・ふじもり夏香

〈登場人物〉

父 依田勇（よだ いさむ）60代。ある地方の総合病院で、

長年医師、院長を務める。

祖母 依田ふみ江（よだ ふみえ）80代。勇の母。

母 依田清美（よだ きよみ）60代。勇の妻。院長婦人。

姉 依田真里（よだ まり）40代。勇と清美の長女。

国内で有数の大学病院の医師。

妹 依田絵里（よだ えり）30〜40代。同次女。

その土地で人気の幼稚園教諭。

夜。依田家のダイニングルーム。  
舞台上に大きなテーブルがあり、テーブルクロスがかかっている。  
祖母、父は席についている。母、娘二人は立って食器を並べたり  
している。料理は本当に用意しても、あるつもりでも良い。

妹 いつくるの？

姉 あと、どのくらい？

父 2時間くらいかな。

母 ちようど、食事が終わるころね。

祖母 今日のメニューはなんだい？

母 おばあさまの好きなうなぎ、お父様の好きなラーメン、お姉ちゃんの好きな  
からすみ、私の好きなえんがわ押し寿司、みんなの好きなカレー、大トロ握  
り、カキフライ、梅干し、そしてデザートは、絵里ちゃんの好きなチョコレ  
ートケーキよ。

祖母 そりゃあ、盆と正月が一緒に来たようだね。

他の4人、一瞬、動きが止まる。

祖母 いや、昔からそう言うだろ。

父 さあ、食事を始めよう。

全員、席につく。

父 久しぶりにみんな揃って晚餐のテーブルを囲むことができてるうれしいよ。  
そうそう、その前に、みんな、我が家の晚餐のルールを覚えてるね。

全員で、依田家の晚餐のルールを暗誦する。それぞれの気持ちで、  
はつきりとでも洪々とでも良い。

全員 一つ、愛情をあらさまに表現してはいけない。

一つ、死について、語ってはいけない。

一つ、苦痛を、こと細かに語ってはいけない。

一つ、泣いてはいけない。

一つ、叫んではいけない。

父 よし、いいぞ。何しろ、おやじの葬式でもこのルールを守ったんだからな。  
では、いただきます。

全員

いただきます。

しばらく、食事。食の進みすぎる者、まったく進まない者あり。この後、登場人物が一人ずつルールを破ると宣言し、破るが、他の者は沈黙し、何の反応もしない。父が立つ。

父

私は今から、「愛情をあからさまに表現してはいけない」という我が家の晩餐のルールを破ります。

私は心から家族を愛している。でも、それをちゃんと表現してこなかったの  
で、家族には伝わってないだろう。私は、長年、この土地の総合病院で医師、  
そして院長をしてきた。正直に言えば、若い看護師にふらふらしたこともあ  
ったさ。色香を白衣に押し隠してるのが、たまらなかった。しかし、決して、  
家庭は壊さなかった。また、医療ミスすれすれの手術や、有力者の患者を他  
より優遇したこともある。それもこれも、医者 of 良心を犠牲にしても、自分  
の地位を守り、ひいては家族を守るためだった。

母と妻の関係で両方が愚痴を言っても余計な口は出さなかった。娘たちの教  
育もすべて妻に任せ、家のことには一切手を出さず、仕事や付き合いに全力  
を傾けたのも、すべては、家庭がうまくいくようにと願ってのことだ。

そうそう、私がラーメンを好きになったのも、きっかけは、妻に、弁当の  
心配をさせないための心遣いからだ。

こうして、必死に守って来た家族を私は誇りに思っている。母は長寿、妻は  
貞淑、姉娘の真里は大病院の医師で、私より優秀だ。妹の絵里は、私とは  
まったく違うタイプで長年、幼稚園教諭として働いている。明るくて可愛い  
子で子どもたちにもとても好かれていたらしい。二人とも、嫁に行かなかっ  
たのは残念だが、今となってはそれで良かったかもしれない。

ともかく、私は家族を愛している。今日まで家族を守ってきたことを誇りに  
思っている。そして、この晩餐を家族と共にできたことに感謝している。

父、座っている祖母、妻、姉、妹にそれぞれ、肩を触るとか髪を  
なでるなど、愛情表現をする。4人はまるで何も起きなかったよ  
うに振る舞う。今起きたことについて、誰も何も言わない。

父、席に着く。

母 真里ちゃんは、お酒飲まないのに、からすみが好きなのよね。そうそう、勇さんも好きでしたよね、一本つけますか。

父 いいね。

祖母 私はワインをもらうよ。

母 はい。私達も、ジンジャーエールでも飲みましょうか。

妹 私はビールにして。

母 まあ、珍しい。

母、飲み物を取りに行く。

お盆にのせて、戻って来る。それぞれに、飲み物を配る。

父 晚餐に

父、盃を軽くあげる。それに合わせて同じ動作をする者、しない者あり。食事が続ける。祖母立つ。他の人は反応せず、無言。

祖母 私は今から、「死について語ってはいけない」というルールを破ります。

私は死など怖れていない。多分六〇年余り前から。

あの子が天に召されたあの日から。

暑い夏の日だった。あの子は友達と川で遊ぶんだと元気に家を飛び出していった。ちょうど、うちにお客様が来ていたのだ。夫の部下だった。

とても魅力的な青年だった。夫は留守だった。突然、思いの丈を告げられた。もちろん、はつきりと断り、いさめた。でも、その同じ時に、あの子は。

私の気持ちがわかるだろうか。「なぜ、あの時、川についていかなかったのか」と言う後悔、「一瞬でもあの青年の思いをうれしく思ったんじゃないか、ちょうど、あの子が苦しんでいる同じ時に」という強い自責の念、瞼に焼き付いているあの子の可愛い笑顔、しぐさ、声、「もっともっと生きたかったろう。やりたいことがあっただろう」というやりきれなさ。そんな諸々の感情が常に体の中をめぐっている。

あの日から、私は、半分死んでいるようなものだ。まだ、勇が二歳だったから、本当に死ぬわけには行かなかった。それ以後もその時々、生きなければならぬ責任があつて、とうとうここまで生きてしまった。

勇は覚えていないだろうが、あのルールは、沈みがちだった私達夫婦が、勇のためにせめて晚餐の食卓を暗くしないようにしようと決心し、約束したものだ。

あの子にも、夫にももうすぐ会えるだろう。夫の好きだったうなぎとあの子の好きだったカレーライスを今夜は食べよう。

祖母、座り、まるで何も起きなかったように、全員振る舞う。  
今起こったことについて、誰も何も言わない。

母 そろそろ、チョコレートケーキも切りましょうか。絵里ちゃんが好きなのよね。

妹 今はそれほどでもないんだけどね。昔、お母さまが良く作ってくれたじゃない。お祝いの時じゃなくて、悲しいときとか、へこんでる時が多かったな。初めて失恋した時とか、部活の最後の試合で負けたときとかね。

姉 そうそう、私はそんな時は何も食べられなくなるんだけど、絵里は、部屋にこもってぼろぼろ涙をこぼしながら、パクパクケーキを食べてたのよね。たくましいなあと思ったわ。

父 大抵のことはあれで乗り越えたんだけどなあ。  
さあさあ、ケーキ、ケーキ。

母、ケーキを切り分ける。  
真里、コーヒーを取りに行き、持ってくる。  
しばし、コーヒータイム。母立つ。

母 私は今から、「苦痛をこと細かに語ってはいけない」というルールを破ります。

私は人様から褒められることが多いです。

地方の名士である総合病院の院長の貞淑な妻で、口うるさい姑につかえ、二人の娘も立派に育てたと、人様からはそう見えるようです。

娘の一人は、国内でも有数の大病院の医師、もう一人はこの土地で評判の人気の幼稚園教諭。うらやましがられることもあります。

でも、わたしは、もう何十年も自分の罪に苦しんできました。

その罪の証はいつも、私の近くにいて、罪の証とは想像もつかないほど、明るく、屈託なく、育つてゆきます。

そう、絵里は私のたった一度の不貞の子、かもしれないのです。

相手は、真里の幼稚園の体育の先生でした。私は、その頃、いわゆる育児ノイローゼだったのかもしれない。義母（はは）は「子どもから片時も目を離すな」と口うるさく、息がつまりそうで、主人は家にはほとんどいないし、家事も育児もまったく助けてくれませんでした。追いつめられていた私は、ふとしたことからその先生に話を聞いてもらうようになり、いつしか彼を心の支えにしていました。もちろん、体の関係などはありませんでした。でも、そんな時、彼のお父さんが亡くなりました。残されたお母さんのために、彼は故郷に帰らねばならなくなり、別れを惜しむあまり、遂に私たちは結ばれてしまったのです。本当にたった一度の過ちです。それから、しばらくして、絵里をおなかに宿したときから、私はずっと、自分の罪に苦しみ、おびえ続けてきました。幸か不幸か主人と彼は同じ血液型で、主人とも夫婦関係が無かったわけではないので、私にも絵里がどちらの子かわかりませんでした。

成長するにつれ、絵里は、主人とはまったくタイプの違う明るく無邪気な少女になりました。真里が迷わず医学部を目指したのに対し、絵里は全く興味を示しませんでした。絵里が、唐突に「幼稚園の先生になりたい」と言い出したときは、立っていられないほどのショックと罪悪感と恐怖と、予期していなかったほどの愛おしさが、一度に押し寄せました。そんな私に気付くはずもなく、主人は、自分と似た真里よりもむしろ絵里を可愛がっているようにみえます。

ええ、私の罪は消えません。けれど、今となってはこのまま黙ってしましよう。

あの人は、どうしているのでしょうか。彼は、絵里のことをしらないままです。今夜、私が食べたかったえんがわ押し寿司は、彼の故郷の味なのです。

母、座り、全員何も起こらなかったように振る舞う。

今、起こったことについて、誰も何も言わない。

真里、研究の方はどうなんだい？

現在のところ考えられるすべての病気に対するワクチンの研究は、かなり進んだわ。ここまでの成果を例の計画に、提供したのよ。

それは素晴らしい。これからの人類に貢献するだろうね。

そうかもしれないけど、違うかも。お父さまもわかるでしょうけど、いくら病気に對抗しても、必ず新しい病気が生まれるのよ。やればやるほど、医学

って無力だと思わ。

妹 医学だけじゃないわよ。私だって、今まで結婚もせずに幼稚園教諭として子どもたちを育てて来たけど、なんの意味もなかったんじゃないかと思えるわ。絵里、そんなことを言わないでくれ。

父 医学とか教育とかそんなことじゃなくて、人間が無力なのよ。

妹 確かにその通りかもしれないが、結局、人間は、与えられた場所で、その時々でできることを精いっぱいやるしかないんじゃないかな。

母 もう一杯、コーヒーをいかが。ケーキもまだ、残ってるわよ。

祖母 料理もまだまだ残ってるじゃないか。作りすぎじゃないかい？

母 いいじゃありませんか、今日は。さあ、食べましょう。

なんとなく、食事を続ける。

姉立つ。

姉 私は今から、「泣いてはいけない」というルールを破ります。

私がからすみを好きなのは、子どものころ、父がよく、からすみで晩酌をしていたからです。私も父のそばにちよこんと座り、からすみを一切れ貰うのがうれしかった。私は父が大好きだった。でも、絵里が生まれてから、父は私より絵里を可愛いがった。少なくとも私にはそう見えたの。私は父に認められたくて、必死に勉強し医学部に入った。さらに頑張つて、日本でも有数の大病院に勤めた。父はとても、ほめてくれたけど、やはり、絵里に対する無条件の愛情とは違う気がした。

なぜだか、涙が出てしまうの。人生のむなしさに対して？

それとも、父の愛がほしい？

いいえ、多分、一度も顔を見たことのない私の息子のこと。

一度でいいから会いたかった。彼は例のNOAH（エヌオーエイチ）計画で、今日、遠い地に旅立つと風のうわさで聞いた。

彼は生涯、私のことなど知らないで過ごすだろう。

彼の父親についてはあまり語りたくない。現代の頭脳の10人に入る人で、父と同じくらいの年だ。不倫だった。父を慕うあまり、不倫に走ったとは思いたくない。私は親にも秘密で子どもを産み、生まれた子はすぐに、子どものいない、国の要人の実子として、もらわれたらしい。

私はまだとても若く、仕事もしたかったので、それでいいと思つた。

そして、今でも、その選択は正しかったと確信している。  
でも、やはり、息子に会いたい。

姉座る。全員、何も起きなかったようにふるまっている。  
今起こったことについて、誰も何も言わない。妹立つ。

妹

この際だから、言っちゃおうかしら。私、本当は無邪気で明るい娘なんかじゃないの。でも、演じていたというのもちよつと違う。このうちはみんな変だった。お父さんは仕事仕事とうちに帰ってこないし、おばあちゃんは私たちの一挙手一投足にピリピリしてるし、お母さんは、私とお姉ちゃんに對する態度が微妙に違ってなにかわだかまりがある感じ。お姉ちゃんはとても同じ姉妹と思えないほど優秀だった。この家族の中で何とか生きてゆくために自然と「明るくて誰からも好かれる子」という生き方になったの。でもね、私本当は誰よりも感じやすく、周りの人の気分に敏感で、深く考えてしまふタイプなの。そんな感情のすべてを今まで心のうちに押し込んできたけれど、もう外に出しちゃおうかな。

妹、座る。全員、何もなかったようにふるまっている。

父、腕時計を見る。

父

さて、そろそろだな。

父、リモコンを操作する。客席側にテレビがある感じ。みんな席につき、テレビの方を注目する。舞台上にニュース番組のアナウンサーの声が聞こえる。

アナウンサーの声

最後のニュースをお伝えいたします。

先ほど、NOAH-U20（エヌオーエイチ アンダートゥウ エンティ）計画、別名ノアの箱舟計画で地球を飛び立ったロケットが、無事、爆発圏内から脱出したとの連絡が入りました。このロケットには、各国の政府代表と20歳以下の特に優秀とみとめられた天才児など100人が乗り込んでいます。今後、新しい地球の未来を作ってくれるものと期待されています。

続いて彗星情報です。ハルマゲドン彗星は、予定通り地球を目指して直進しています。衝突時のエネルギーは300億メガトンと

も言われ、地球がすべて爆発することは確実とみられています。  
あと、1分ほどでしょうか、皆様、今夜は、大切な人と、おいしい  
晚餐など囲まれたことでしょう。私は…いえ。

では、そろそろ、カウントダウンを開始いたします。最後までお  
付き合いましたありがとうございます！  
皆さん、さようなら！

妹立つ。

妹 私は今から、「叫んではいけない」というルールを破ります。

アナウンサーの声 10、9、8、7、6、5、4、3、2、1  
妹 (叫ぶ)

妹、カウントダウンと同時に大声で叫ぶ。叫び続ける。  
カウントダウン終了とともに叫び声も終了し同時に暗転。  
そのすべてが同じ瞬間に起こるように。

〈参考文献〉

「劇作ワークブック」戯曲の書き方を学ぶ13のレッスン」  
ジャンクロード・ヴァン・イタリー著、松田弘子訳、日本劇作家協会発行

\*作品内の料理は、内容に影響のない範囲で変更してもかまいません。